
商人と元令嬢

MZN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

商人と元令嬢

【Nコード】

N8457U

【作者名】

MZN

【あらすじ】

こまけえこたあいんだよ(@ @)!!な駆け出しの商人と心を閉ざした元令嬢のほのぼのラブコメ(?)です。むしろラブラブですリア充爆発しろ(*´ω`\*) タイトルに現在が付いてるのは既に夫婦になってる設定のラブラブのろけ話です。変な構成ではないです(´・ω・`) 気になる方は過去編だけ拾って読んでいただければ…過去編と現在編は物語的には分離独立してますので(;´д`)

01 - 現在：あばたもえくぼ

皆さま、こんにちは。

私はヨオラ・ミリエ。兼業主婦です。

夫アルキンは、旧都チュラにて生地仲買と小売の店を営んでおり、私も、夫が養父から受け継いだ店を手伝っています。

近頃は、王都にも新しく店を出せることになりまして、おかげさまで毎日を忙しく過ごしています。

お店で働いている若い売り子さんに『おかみさん』なんて呼ばれるたびに、私なんかで大丈夫かしらと不安になる毎日ですが、夫の手助けのおかげで、なんとかやっています。

本当に、夫には助けられてばかりです。

彼と出会ったおかげで、私は『普通』の生活を送れるようになりましたし、以前よりも『強く』なれた気がします。

私は弱い女でした。

そのことに気づけたのは、彼が…アルキンがいてくれたおかげです。とても、感謝してもしきれません。

アルキンがいてくれるなら、私には、こわいことなんて何も無いのです。

……あら、失礼。のろけてしまいました？

でも私の本当の気持ちですから。

こんなことばかり言っているせいか、おかみさんは心配事がなさそうでいいですねえ、なんて皆さんによく言われますが…全く無いということもないんですよ？

目下の心配事といえば、ええと…あっそうそう、去年生まれた二番目の子供のことでしょうか。

息子はどうか、私と同じ《ちから》を持っているようです。

稀に『精神感応』で語りかけてきますし、すでに『予知夢』なんかも見ているようで、機嫌よく笑ったかと思えば、直後にはイヤダイヤダと泣いていたりして、なかなか不安定です。…あ、実際にしゃべっているわけではありません。私も同じ《ちから》を持っているので、息子の心が少しわかるだけです。

自分の幼い頃を思い出しますと、確かに赤ん坊のころ、なんだかごちゃごちゃしたビジョンばかり見ていたために、現実とビジョンの区別がつかず、ひどく居心地の悪い思いをしたような記憶があるので、息子にも似たようなものが見えているのでしょう。

息子が泣く時には、そつと抱きしめて、名前を呼んで大丈夫よと言つてあげます。何度も何度も。泣き止むまで。

かつて、幼い私がしてほしかったことを、彼にはちゃんとしてあげています。

大丈夫、なんにもこわいことない。

誰かにそう言つて抱きしめてもらえれば、人は生きていけるのです。

私にはアルキンがいます。彼が、大丈夫だよと言つて抱きしめてくれるから、私は生きていけるようになりました。

この子にもいつか、そういう相手が現れますようにと、息子を抱きしめるたびに祈っています。

祈ることしかできないなんて、人はなんて無力なのでしょうね？

でも正直、あまり心配はしていません。

息子の人生は息子のもので、私がどうこうできるものではないですし、多少の手助けはするにしても、最終的には息子が切り開いて行かねばならないのですから。

それに何より。

息子は、アルキンの子ですもの。心配することなんてありません。それに、ただか過去や未来が見えたり他人の心が読めたりする程度で、折れたり砕けたりするような弱い人間など、アルキンの子だとは認めません。

……いけないわ、母親失格かしら？

私がこんなことを考えてると、アルキンに知れたら大変です。彼は、私と同じくらい子供達を愛していますから、きっと、こっぴどく叱られてしまいます。

私はアルキンが一番なのにな。まったく癪だわ。

でも、考えてみると不思議です。

自分が、こんなにも誰かを愛せるということが、奇跡のように思えてなりません。私はかつて、人を憎んでさえいたのに。

……本当に、アルキンには、感謝してもきれないほどのものをもらいました。

私はとても幸せです。幸せすぎて、不安になってしまつくらい幸せです。

でも、何より幸せなことは…アルキンが私を愛してくれていることです。

彼は、誰よりもしなやかでしたたかな心を持っていて、いつでも飛び立てるほど身軽なのに、それでも、私を愛してくれます。子供達を愛してくれます。家族や仲間を愛してくれます。

いったいあの身体のだこに、それほどのちからを秘めているのか。まったく見当もつきません。

別に剣士のようにたくましい身体をもっているわけではないし、物語の勇者のように勇気や正義にあふれているわけでもない。でも私には、アルキンがとても大きく思えます。

時に、羨ましく思えるほど。

でも、そう思うのは私がアルキンに「惚れている」からよと、お義姉さんには笑われましたが…そんなことはありません。きっとアルキンは特別な存在です。

……誰に言っても、まともに取り合ってくれないけど。

でも「あばたまえくぼ」と笑われるのも、いいかげん悔しくなってきたので、ちよつと《ちから》を使って、彼が本当に特別な存在なのだと、証明できるような事実を探そうと思います。

幸い、アルキンは昨日から、王都に出した店に出かけていて、三日後まで戻りません。

さすがに本人の前で《ちから》をつかうのは憚られるので、これはいいい機会です。

まずは手始めに《過去視》で、私と出会った頃の彼が何を考えていたのかを…

「まー、リッキイなくてゆお？」

「……大丈夫よ、ちよつと眠くてぐずってるだけだから」

「……ちよーなくてゆお？かいそお……」

「いいのよ。めいっぱい泣けば肺が丈夫になるから」

「……まま…ひろい…？」

「そうね。だからアリエもリックスも、強くならなくちゃね。パパのように」

「……………」

なんだか娘の方から、幼児には似つかわしくない深い絶望と悲壮感が漂ってきた気がしなくてもないので、気のせいでしょう。

それに、仮に気のせいじゃなくても、問題ありません。娘もアルキンの子ですから。

さてそれでは、気を取り直して、はじめましょうか。過去の世界



02 - 過去：ヨオラ・アルキン23才

俺の名前はヨオラ・アルキン。

いわゆる王室御用達の衣装店で、販売員のはしくれをやってる。

王都じゃ、ちよつとは名の知れた『アサラサス』って衣装具屋だ。お得意先は、王族は当然ながら、上流階級の貴族連中を手厚くカバーする。残念ながら庶民は呼びびじゃない店だな。

ちなみに中／下のほうの階級は、同系列の『リャンサス』がやってて、俺ホントはそっちで働きたかったんだよね。まあ修行中の身じゃ選択の余地もないけど。

そんな俺の養家は、旧都チュラの生地仲買商だ。

15の年に、オヤジの紹介でこの王都に修行に来た。奉公先が王室御用達店だと知った時はビビったよ。

いや、だって俺、自慢にならね〜けどオヤジに拾われるまでの数年間、ほとんど路上のチンピラみたいなもんだっし。

つゝか一度ヤクザの鉄砲玉やらされて死にかけたこともあるし…アレはマジでヤバかったよな…姉貴とオヤジがいなかったら確実に俺今生きてねえ…

……姉貴、元気かなあ…そういや、こないだ4人目ができたって手紙の返事出したつきりだ…それにトオルも元気にやってっかな…つとと、それは置いといて、だ。

まあそういう俺なんだが、一応オヤジに礼儀作法やら色々叩き込まれたとはいえ、いきなり王室御用達の店で小僧やれとか言われた日にゃ…いいのか？大丈夫か？とか余計な心配しちゃった。

いやマジで無駄な心配だったけどな。あのクソ狸爺じゃなかった大旦那様には要らん御世話だったよ…

つか、ヤクザも確かに怖かったが、大旦那様もたぶん…ある意味

ヤクザと同「いやなんでもない。

ま、どのみち小僧じゃ、下働きみたいなもんだし。

掃除洗濯使い走り…最初の頃は朝から晩までいろいろやらされたな。逃げ帰った同期もいたっけ。

でも逃げるヤツはだいたい、そこそこの店の跡取りって相場が決まってた。そんなに辛かったかねえ。

寢床も着る物も食事も全部保証してもらえりし、罵詈雑言浴びるわけでもないし（ヘマやらかした時はぶん殴られたけどな）月に一度くらいは休みもあつたし、微妙に奴隷っぽい扱いだったけど、ホンモノの奴隷と比べたら桁違いに良いのにねえ…とか思っちゃうのは俺が最下層出身だからだな。

まあそれはさておき。

そんなチンピラ上がりの俺だが、ここアサラスで丁稚の小僧から始めて早8年…1年前からは、一部お得意様の御用聞きを任されるまでになり、販売員としての評価は…最近、まあまあイケてるんじゃないかと思ってる。

……たまに狸爺が「どれ、ゲンの小僧の今月の売上は…フーンなるほどねえ…」とか含みがありそうな微妙なセリフ吐くけどな。

くっそ…っていうか、いい加減小僧扱いすんなジジイ！俺には「アルキン」っていう名前があんだよ！

そういや、狸爺もとい大旦那様には一度も呼ばれたことねえ…チクショウいつか独立して自分の店持つてジジイの店よりでかくしてやる！その時刮目して思い知るがいい！ヨオラ・アルキンの名を！

……あれ？俺オヤジの『ヨオラ商会』継ぐんだっけ？

まあいつか、おいおい考えれば…

さて、そんな俺が、今現在どこで何をしてるかといえば。

「お、ヨオラ君じゃないかアサラ屋の。何、またソーマを搾り上げに来たのかい？」

「……人を借金取りみたいに言わんでくださいよ……いや、今月分の請求書を取りに来ただけですって！」

ここは傭兵ギルド南町支部。

うちの店の警備とか、隊商を出す際の警護その他もろもろの業務を任せてるのがここの傭兵ギルドなんだが、その経費の請求書を取りに来たんであつて、ここに所属するダチに貸した金を取り立てるのはついでだ。

全く、ソーマの野郎……「飲み代のツケを払うから貸してくれ」とかしれつと借りたままもう1ヶ月だぞ？

それと、昔あいつに貸したキログ製ナイフが未だ戻ってこない件について。

くっそ、あのナイフ買うと高いのに……

しかもアレは俺が、店の得意先の某未亡人に気に入られた時に、うまいこと騙sじゃなかった二人の思い出の品が欲しいと頼み込んで貰ってきた戦利品もとい名のある逸品なんだぜ……いざって時は質草にもなるのに……

いやそれはとりあえず置いてこつ。

顔見知りのオッサン（一応警備隊長）と立ち話をそこそこに切り上げ、俺は借りパク野郎ソーマを探し……じゃなかった、とりあえず経理部に顔を出した。

「こんにちは。アサラサスですが、マプさんいます？」

「あらヨオラさん。……ああ、請求書ですね、えーと……ハイこれ」

「ども。……あれ、マプさん髪切りました？」

「えゝよくわかりましたね！どうかしら？」

「いやあ、若返りましたねえ」

「ちよつと！どつという意味よ！オバサン怒りますよ！」

と声を上げつつ、意外と楽しそうでもあるこのご婦人は、4人の子供を女手一つで育ててる肝っ玉未亡人だ。

同じ未亡人でも、どつかの貴族よりマプさんの方がよっぽど好きだけだね、俺は。

……しかし実際食ったのはどつかの貴族。全く我ながら……いや、止めよう。考えてると虚しくなる。

まあ、それも置いといて。

マプおば様との世間話も適当に切り上げ、今度こそソーマもとい俺の金を持ち逃げしてる盗人を探す旅に出る。

畜生ソーマどこだこの野郎。お前が今日ギルドに来ることはわかってんだよ。

返せ！せめて先月貸した500ゲル返せ！

とりあえず上の階から（経理部は建物最上階にある）順に見て回るが、なかなか見つからない。

アレ？あいつ今日が装備の点検日（ギルドから装備を支給される傭兵は半年に1回は点検を受ける義務がある）だって言ってたよな確か。

うゝん…とりあえず受付で聞いてみるか？

ちょうど一階に着いたので、向こうに見える受付嬢の一人、ナリーンに向かって手をあげた。それに気付いた彼女も、軽く目配せしてくれたが、あいにく接客中だったのしばらく待つことになった。

受付あたりにいる数人の客からは見えにくそうな、隅の待ち合い席に腰掛け、手持ちの書類をチェックするふりをしながら、俺はなんとなくナリーンの前の客を見た。

客は二人組の女だった。色褪せたマントを羽織ってるあたり、王都についたばかりの旅人か。あるいは流しの傭兵だろうか。

一人は耳が隠れる程度の短い栗毛で、浅黒く焼けた肌、いかにも旅慣れた傭兵だ。

もう一人の方は、癖のない黒髪を頭の上の方で一つに結わえ、まっすぐ背中に垂らしている。けっこう長い…それにあの肌の白さ。元々は傭兵じゃないな。

察するに、栗毛の女が黒髪の女を連れて来たって感じか？

「……あ…間違えた…」

ふと、黒髪の女が呟いた。書類を示しながら顔を上げる。

その白いうなじが、やけに目についた。

俺は女の横顔を追う。整った鼻筋に涼しげな目元。肌の白さは、よく見れば病的なほどだった。それとは逆に、闇のように黒い髪。

へえ、こいつはなかなか…いい女じゃないか？

「ンン？…あゝ、線ひいて上に書き直せばいいんじゃない？いいですよネ？」

「ええ、構いませんよ。ええと…必要書類はこれで全部と…はい、ではバンレツシィ・ミリエ…さん、助っ人傭兵登録、確かに承りました。ありがとうございます」

話を聞いてると、やっぱり流しの傭兵のようだ。助っ人登録に来たのか。

ちなみに助っ人傭兵ってのは、ギルドに所属こそしないが、名前や所在地を登録しておいて、都合が合うときだけ仕事を探しに来るってシステムだ。いいやなゝ自由そうで。

まあでも、契約傭兵よりも手取りは少ないらしいけど。…ですよね。

「よっしゃ。これでミリエも傭兵だヨ！」

「……意外と…簡単なのね……」

「まあネ。…ところで、今なんか仕事ありますか？」

「そうですねえ…術士の方で、こちらでの経験が浅い方ですと…これくらいでしょうか」

そう言いながら、何枚かの紙を差し出すナリーン。へえ。あの二人、術士なのか。

「……ん、まア最初はこんなモンか…」

「ただ、バンレッシイさんは治癒術が使えるということですので、治癒術士のみの求人はこちらですね」

と、ナリーンは栗毛の女に見せたものより厚めの書類の束を黒髪の女に差し出した。

「おっさすが！ミリエ引く手あまただネ！」

「……………」

黒髪の、口数が少ない女の方が、どうやら治癒術士らしい。治癒術…修道女か。あ、なんかそれっぽいかも。

……ところで。

バンレッシイ…って言ってたか？バンレッシイ…どっかで聞いた覚えが…

あゝ喉のこのへんまで出かかっているのに出てこない感覚…バンレッシイ…確かに聞いたことがある…が、出てこねえ！

チクシヨ―気になるじゃねえか！

俺が悶々としてるうちに、気が付けば女たちの姿は消えていた。

どうやら今日は登録だけにしたいらしい。いやそんなことはどうでもいい。問題は…

「くっそ…誰だっけ？」

ナリーンがいるカウンター席に向かいながら俺が唸っていると。

「何ブツブツ言ってるの？」

求人表をトントン揃えながら、ナリーンが話しかけてきた。

「よおナリーン。ところで、今の黒髪の女ってさあ…」

「あつ、あんたも気付いた？アレって、出家したとかいう、バンレッシイ家のお嬢様だよねきつと！」

「えっ… あっそうかバンレッシイって… あのバンレッシイ侯爵家か！」

思い出した！そうだよ！うちの店の上位にランクインする御得意様じゃねえか！なんでド忘れしてんだ俺！？」

「ええ… 気付いてなかったの？アサラサスの販売員ともあろう男が…」

露骨にバカにした目で俺を見るナリーン。くっそ…

「し、仕方ねえだろ！まさかこんな場所に、侯爵家のお姫さんが…
っていうか、あの話マジだったのか？出家とか…」

そうだ。噂だけは聞いてた。

現在バンレッシイ本家にいるのは、侯爵当人と夫人、家督を継ぐ予定の長男と妻、もうすぐ某伯爵家に嫁ぐ娘、その下に末娘、最後に末息子、ってな感じで7人だったと思う。

だが長男の下に、すでに家を出た子女が何人かいて、そのうち一人が、なんと出家してどっかの山に入ったという話だった。

一応俺も、伊達にアサラサス販売員になれた訳じゃないんだぜ。カモの特徴じゃねえ御得意様の情報くらい、覚えてて当然だな。

……家名を度忘れしたのは… えーと、そういうこともあるよねっていう。

気を取り直して、ナリーンの話に意識を向ける。

「みたいね。でもほら、コレ見て。さっき彼女が書いてた書類」

「おいおい… いいのかよ部外者に…」

と言いつつしっかり受け取り目を通す俺。いやあ、情報収集は商売人の基本ですから。

「彼女、一回名前を書き直してるの。スカヤクワムを消してバンレッシイに」

「へえ… スカヤ… キノシアの山だったかな？クワム（修道女）を消したってことは…」

「還俗でもしたのかしら…」

普通、修道女や修道士は所属する寺院名を家名代わりに名乗る。出家するってことは、文字通り家名を捨てることだからな。

だが、彼女は家名を名乗った。

こりゃナリーンの読み通りか？

「……あれ、住所は東町だな？」

俺は首をかしげた。基本的に、上級貴族の屋敷は全部内堀地区にあるはずだが……

「あ、それ宿屋の住所よ。多分エルダル館。助っ人登録する人には多いの。…ホントは、きちんとした住所を書いてもらわないといけないんだけどね」

言いながら肩をすくめるナリーン。

まあ、助っ人は、繁忙期にかき集められるだけの非常要員つてのも多いからな。いちいち管理すんのも手間なんだろう。

それに、うちの店みたいなの、きちつとしたところに出す傭兵は、出所も性格もきちつと管理してることは知ってるし。

それはそうと、だ。

実家の住所を書かなかったのは、身上を知られなくなかったからか、それとも家には戻らないつもりだからか。

「……だがいずれにせよ…若い娘さんが白だの黒だの、清廉すぎる服しか持っていないのは問題だよなあ……」

フフフ…いいカモじゃねえお客様の予感！

「うわぁ出た。アサラサスの魔の手が、今まさに清らかな修道女様のもとに……」

「オイ、聞き捨てならんこと言うな。俺はただお客様に、いつでも素晴らしいお召し物でいていただきたいと願ってるだけだぜ？」

「あら偉いわね」

鼻で笑って、ナリーンは俺の手から書類を取り戻す。

本来は部外者に教えちゃいけないこうした情報を流してくれるのは、俺が、このギルド最大の取引相手であるアサラサスの人間だからだ。

もちろん俺自身も、彼らの信頼を得られるように努力はしてるけどね。

とにかくまあ、そんなこんなで、興味深い情報を仕入れた俺は、さっそく裏を取るべく店に戻ることにしたのだった。

ちなみに。

バンレッツィ家に何を売り付ければ今月の売上はどのくらい増えるだろうかと、狸の皮算用にすっかり気を取られた俺が、借りパクのソーマから金を取り立てそびれたことを思い出したのは、店に戻ったあとだった…

チクショー…なんかこの流れでまた「借りたまま返さない」とかいう展開になりそうな気がしないでもないぜ…

03 - 過去：アサラサスにて

店に戻る頃には、日がそろそろ傾きかけていた。

けっこう時間くっちゃまった…お、カルシイさんだ。

店の裏門前に立っている顔見知りの契約傭兵に、俺は手をあげて挨拶した。相手も気付いて会釈してくれる。

「やぁおかえり、アルキン君」

カルシイさん確か連勤5日目だっけ？大変だなあ…

「ただいまツス。いやぁ〜今ギルド行ってきたんスけど…って…
あああああ！？」

「ど、どうしたんだ？」

そこでやっと、ギルドに出向いたそもそもの目的を思い出した俺。

「ソーマに金返してもらうの、忘れてた…」

……ちくしょーマヌケすぎる…何しに行ったんだ…ハハハ店の事務書類を取りに行ったに決まってるじゃないか…ハハハハハ。

「ああ…あいつまだ返してなかったのかい。…いやその、仲間が申し訳ない」

ガツクリ肩を落とした俺に、カルシイさんはいかにも申し訳なさそうに言った。

別に、カルシイさんがソーマの行動に責任を持つ義理もクソもないはずだが、人の良いこのおじさんは何かと他人をフォローしてくれる。嗚呼疲れた心に染み入るやさしさ。

「…ハハハ。次、あいつが出勤してきた時には、一発殴っていいですか？」

「うゝん、それで君の気が済むなら…」

苦笑しながら言うカルシイさんに俺も苦笑を返して、店内に入っ

傭兵ギルドで受け取った書類を副番頭さんに渡して、俺は所属の部署に戻った。

ちなみに、俺の所属は販売部二課だ。二課の担当は城北および城東区で、顧客はざっと1000人にもなる。

俺は、正式に販売員として認められてまだ1年しか経ってねえから一番未熟だが、それでも、顧客のうち半分くらいは、名前と社会的地位と服の趣味と家族構成と交友関係を頭に叩き込んでる。

……だが、俺なんかまだまだ。謙遜で言っただけじゃないぜ。上を見ればキリがないんだよマジで……

「ただいま戻りましたあーっと」

「……やっと戻ったかアルキン。金は返してもらえたか？」

いきなり痛いところをついて来たのが俺の指導役、ノウエス先輩（30♂未婚）

……先輩やめてください……心が悔しさで軋むんです。

ああ今日は取り戻した500ゲルで美味いもんでも食ってあわよくば可愛いおねえちゃんも食って帰ろうと思ってたのに畜生！

……可愛いおねえちゃんといえば……あのバンレツシイ家のお嬢様、いい女だったなあ。実はけっこう好みだったんだよね。おとなしそうな感じとか。

横顔しか見れなかったのが残念だ……バンレツシイの御屋敷に行ったら会えるかな？

そう予定では、ああいう女を食事に誘ってあわよくば……あわよくばッ……！

……ちくしょー何事もなかったかのように話題を変えよう。

「いやそんなことより、ちよつと興味深い話を仕入れて来たんです
が」

かくかくしかじか。

バンレッシイ家の令嬢らしき女のことを話すと、予想通り、その場にいた先輩方から次々に補完情報が出てきた。

「ああ…それは三女のミリエ様ね。美人だったでしょ？」

「一時は第二王子殿下の婚約者候補にも上がったらしい。当時は、城東一の美女って言われてたが、どうにも…変な噂もあってね」

「千里眼」

「人の心が読めるとか死が分かるとか、果てはどこそこのだれそれを呪い殺したとか」

「思い出した。ミント家の…今はステイ男爵夫人が、ピリス様が騒いでなかったかい？」

「そういえば、魔女がどうのこうのと…」

「ピリス様はあの頃、レギオ殿下の熱烈な信者だったからなあ…」

「でもその、ミリエ様を見初めたのは、殿下だっていう話じゃありませんでした？」

「そうそう。ミリエ様の社交界デビューの晩餐会で」

「レギオ殿下は黒髪がお好きだからね…」

「晩餐会用に、シスイ布のドレスを買ってもらったんだっけ？あの頃のシスイものはけっこう良かったよね」

「領主が代替わりして税金が上がってから、出来が微妙になっちゃいましたかね」

「とにかくまあ…そんなわけでか、あんまり表には出てこなかったわねえ…」

「確か、社交界デビューの後すぐ出家して…あれは何年前だったかしら？」

「うちの長男と同年のはずだから、今年で22くらいになると思うよ」

「まさか本当に修道女になるなんて…もしかして千里眼つてのも、あながち嘘でもなかったのかもねえ…」

……さすがだぜ。我らがアサラサスの上位悪魔じゃなかったベテラン販売員の皆様。

他にも、バンレッシイ家の内部事情とか、侯爵夫妻より息子の嫁の方がいいカモ…様々な衣装品を買ってくれる超御得意様だとか、四女が今月末にケイス家に嫁ぐからその関係で戻ってきたんじゃないかとか…つつけばさらに大量の情報が、塵のように舞い上がりそうだったが、気が付けば日も落ち終業が迫っていた。

「ふむ…よし、明日はバンレッシイ家に顔出してみるか。おいヨオラ」

と呟いたのは、これまたベテランのクスト（51。既婚）班長。先程、ミリエ嬢と同じ年の長男がいるとのたまったロマンズグレーだ。

ちなみに外見が、モロ貴族の家に仕える執事みたいな上品な老紳士なんだが、その売り方たるや…ちよつと具体的には説明し難いが端的に言つと……すぐく…えげつないです…

そして営業成績は、王室専門の一課を除けば販売部のトップを張る。

年齢的にも、そろそろ管理職に就いて然るべき人なのに「まだ売り足りないから」とかいうアレな理由で課長就任を蹴った猛者でもある。まさに販売の鬼。今の俺には神の如き遠い存在だ。

「俺も行つていいんですか？」

「お前が掴んできた話だ。いい機会だしな。勉強だと思つてついてこい」

「……ありがとうございます！」

よっしゃ！クスト班長の魔性の誘導話術じゃなかったセールストークをこの目で見れるなんて…テンション上がってきた！

とかなんとか、話してるうちに。

「あら、もうこんな時間？早く帰らないと」

所持持ちの販売員は、当然ながら自分の家で暮らしてるので、キリのいいところで帰宅していく。

ちなみに独身を謳歌する俺は、数年前まで店の丁稚部屋で仲間と寝起きしてたんだが、今は住み込みの奉公人が多すぎるとかで追い出されちゃったので、仕方なく自分で部屋を借りて暮らしてたりする。

駆け出しには痛い出費だが…まあ、自由なのはいいんだけどね。

「ヨオラ。お前は、バンレッシイ家に持っていくものを適当にみつくるっけ。明日の朝、俺が確認するから」

「ハイ、わかりました！」

クスト班長の言葉に大声で応えた。やべえ気合い入れて選ばねえと！

……つうか、もしかしくなくても全部俺にやらせてくれんのか…ちよ、マジでこれは……全力でやらないとヤバいかも。

翌日の準備を俺に任せると、クスト班長始め先輩方は帰途につき、俺は一人残される。さて…予想外の展開というか、ある意味予想通りの展開というか。

二課の販売員になって、早1年。

とりあえず仕事の流れは覚えた。仕事に関する勉強も、それなりにやっている。となればそろそろ、先輩方からの試験があってもおかしくはない。つまり。

明日、バンレッシイ家でどれだけの売上を作れるかで、俺の最初の評価が決まる。

……やらいでか…！

気合いも新たに、俺は早速、商品を保管している倉庫に向かった…が、事務棟を出たところで気付く。しまった…もう真っ暗じゃね

えか！

くそつ、光球灯（魔法で灯されたランプ。熱はなくなかり明るい
が使用時間が限られ、値段も高い）の使用費は自腹なんだよな…

……だが、致し方あるまい。腹をくくって倉庫へ…

ちなみに倉庫には、交代で常に警備の傭兵が詰めていて、鍵も警
備員が管理している。入退室時には入庫書にサインしなきゃいけな
いし、かなり面倒な場所だが…まあでも扱ってるものがモノだしな…
あと聞いた話だが、実は現金もけっこう置いてるらしい…銀行預
けろよジジイ…いや銀行にもかなり預けてる（しかも一ヶ所じゃな
く何カ所にも）のは知ってるけどさ…どんだけリスク分散？

それはさておき。

不寝番の警備員に、ハイここにサインよろしく、とかダルそうに
話しかけられる。ついでに光球灯も借りようとして…気付いた。

「……あれっ…ヴィリイ、さん？」

そこにいた警備員は、本来ここの警備を任されてるはずのメンバ
ーじゃなかった。

でも、知らない顔というわけでもなく。

「ん？……ああなんだ、ソーマのツレの…」

「ヨオラ・アルキンです。…ヴィリイさん、なんでここに？」

このヴィリイさんは、ソーマが武術を習った道場の先輩だとかで、
基本フリーで働く傭兵だ。腕はかなりのもので、うちでは、年に2
回ほど出してる隊商の警護助っ人を毎回頼んでる、半契約傭兵みた
いな人だった。

常勤の人達ほど親しくはないけど、ソーマと飲みに行った時に偶
然会って、飯をおごってもらったことならある。いかにも面倒見の
いい兄貴って感じの人だ。

ちなみに、見た目ヒゲのオッサンだけど、俺と3つしか年が違わないらしい…

「当番のリアフがキナ貝に中って腹壊したとかでさ、頼まれたんだ。たまたま俺こっちに帰ってきてたし」

ちなみにリアフってのは、新人の傭兵だ。俺より若くて、よく飯をたかられる。

「うわぁ…大丈夫なんですかね？」

「一日中トイレとベッドを往復してるって聞いたぞ」

ええー俺キナ貝好きなのに…やめてよそういう話…

「しっかし、アンタもこんな時間まで仕事かい？販売つてのも大変なんだねエ」

鍵と光球灯を出しながら、ヴィリイさんは呟く。

「いやぁ…今回は、俺の実力が問われる最初の機会っていうか…」

「フーン」

ヴィリイさんはあんまり興味なさそうな返事だったが、なんとなく誰かに話したい気分の俺は、構わず話し続けた。

「明日、バンレッシイ侯爵家に御用聞きに行こうかって話になったんすけど…俺にその準備を任せるってことになりました…」

「……バンレッシイ？」

「ええ実は」

かくかくしかじか…って便利な言葉だな。

バンレッシイ家に行くことになったきっかけを話すと、ヴィリイさんは、偶然だなあ、と感慨深げに呟いた。

「そのバンレッシイのお嬢さんを、スカヤ山まで迎えに行ったの、俺ら」

「……………ええええええ！！？」

「ちょ、おま…マジでか！」

「あの黒髪で色白の美人の…」

「ああミリエちゃんな。で、一緒にいた茶髪のカキが、俺の遠縁のレニって魔術士だ…ちなみに男だぞアイツ」

「え、ちょ…えええええ！???」

「なんでもアイツの一族は、子供が小さいうちは、男なら女の格好、女なら男の格好をさせるんだと。で、それが癖になったとか言ってた」

肩をすくめながらヴィリイさんは言った。ついでに光球灯も出してくれる。

「マジかよ……完っ壁に、女にしか見えなかったぞ…ていうか、ツッコミどころが多すぎてもう何がなんだか…」

「…いかん、落ちて着け俺。女装少年の件も気になるがとりあえず置いて。」

これはチャンスだ。バンレッシイ・ミリエ嬢に関する、ひいてはバンレッシイ家に関する情報を得るための。

俺は光球灯を受け取りながらヴィリイさんに尋ねた。

「へええ…いや、すごい偶然もあつたもんツスねえ！…でも侯爵家のお姫様が、なんでまた出家なんかしたんスかね？」

「知らん。…ま、色々あつたんだろ」

「ところで、千里眼っていうのはホントなんですか？」

「…ああ、本物だぜありや。予知っていうのか…それに人の過去も見えるらしい」

「どんな子ですか？」

「ん…無口で…かなり真面目だな」

「恋人とかは？」

「いないんじゃないか?…つか修道女だぞ?いるわけないだろ常識的に考えて…」

「好きな食べ物は何？」

「知るか！…っていうか何？おまえ、ミリエちゃん狙ってるのか？」
……ハッ！しまった！

すんごいナチュラルに仕事とあんま関わりない個人情報訊いてた！
いっけね

「いやいや狙ってるだなんてそんな…ただちよつとお友達になれたらな…って…」

「おまえなあ…リアフから聞いてるぜ？御用聞きに行った屋敷の侍女とか、果ては女主人まで食ってるって…」

……チツ。

リアフの野郎…余計なこと口走りやがって…キナ貝持って見舞いにいったるか。

「あんまし他人に口出しはしたくないんだけどさ…アンタも、この店で上を目指したいんなら、もうちょい考えて行動したほうがいいと思うがねエ…」

そして、ヴィリイさんのお説教という名の余計なお世話のせいで、仕事を終わらせて家に帰るのが1時間遅くなった俺だった…

……え？何？自業自得なのコレ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8457u/>

商人と元令嬢

2011年7月21日03時21分発行